

# チャイナタウンのない都市、 ニューデリー

原島 梓

インドと中国。経済規模や人口

等、多くの面で比較されることが多く、日本人にとって両国の関係は密接であるとのイメージが強い。しかし驚くべきことに、実際には、筆者が居住しているインドの首都ニューデリーでは、街中で中国人を見掛ける機会ほとんどなく、むしろ韓国人や日本人を見掛ける機会が多い。もちろん、ニューデリーにはチャイナタウンは存在しない。

しかし、インド全土を見ると、二〇万人程の中国人およびチベット人が居住しており（本稿では、漢民族を中国人、チベット族をチベット人と呼ぶ）、この数は圧倒的に韓国人、日本人を上回っている（詳細は表1を参照）。ただし、その内訳を見ると、チベット人が約一〇万人、中国人も約一〇万人と、チベット人がその半数を占め

ている。

そこで本稿では、チベット人と中国人それぞれに分け、インドとの歴史関係を探ると共に、両民族のインド、とりわけニューデリーにおける活動を追っていく。

表1 インドおよびニューデリーに居住する中国人、チベット人、韓国人、日本人数

	インド全体	ニューデリー
中国人およびチベット人	約196,000 <sup>*1</sup>	—
うち中国人	約96,000	—
うちチベット人	約100,000 <sup>*2</sup>	—
韓国人	9,860 <sup>*3</sup>	約5,000 <sup>*4</sup>
日本人	4,501 <sup>*5</sup>	2,505 <sup>*5</sup>

(注) 1) 2007年、僑務統計年報。  
2) ダライ・ラマ法王日本代表部事務所ホームページ。  
3) 2010年、Ministry of Foreign Affairs and Trade, Republic of Korea。  
4) The Daily Star記事（2007年3月11日）およびMint記事（2012年4月9日）より筆者推計。  
5) 2011年、外務省「海外在留邦人数調査統計」。

始めにチベット人について言及したい。インドに居住するチベット人の人口がこれほどまでに多い理由に関しては、歴史を紐解かねばならない。

一九五〇年代後半に中国国内で起きた「チベット動乱」を契機に、ダライ・ラマ一四世はインドへ亡命した。この際に約一〇万人のチベット人もインドへ亡命している。現在、全世界の亡命チベット人の数は約一三万四〇〇〇人であるが、その大部分がインドに居住している。

ダライ・ラマ一四世は、亡命後、インド北西部のヒマーチャル・プラデシュ州のダラムサラに亡命政府を樹立したが、それ以外にも、インド南部カルナータカ州の数カ所に大規模なチベット人難民入植地が拓かれた。そのなかでも最大の入植地は、三〇〇〇エーカーも

の土地を有するバイラクツペである。亡命の際に、インド政府から借り入れた土地であり、ここには現在約一万六〇〇〇人が住んでいるが、その大半の約一万一〇〇〇人は僧侶や尼僧、出家を目指す若者である。

筆者の居住するニューデリーにおいても、公共交通機関やショッピングセンターで袈裟姿のチベット僧を見掛けることもあり、またニューデリーにはチベット料理のレストランも存在する。今年三月二十六日には、ニューデリーにおいて中国に抗議するために亡命チベット人男性が焼身自殺を図り死亡するという事件も起きており、ニューデリーでは様々な面においてチベットを身近に感じることは多い。

次に中国人に関して見ていきたい。一八世紀以降、インドと中国の貿易が盛んになるに従い、多くの広東人が貿易のためにインドを訪れるようになり、インド、とりわけコルカタに定住する中国人も現れた。一八五八年のコルカタの中国人の人口は約五〇〇〇人であったが、その後、人口は増え続け、第二次世界大戦直後の一九四七年には、その数は一万六〇〇〇人に

達し、その後も増加傾向を見せた。

しかしこうした状況は、一九六二年一〇月の中印国境紛争の勃発と共に一変する。国境紛争勃発後インド政府が一部の中国人に国外退去を命じた他、一部中国人を収容所に抑留したこともあり、一九六〇年代末までにインド在住の中国人の多くは、ヨーロッパ・オセアニア・北アメリカなどへ移住した。その結果、一九七一年にはその人口は一万一〇〇〇人あまりにまで減少した。しかしその後、徐々にその数は回復し、一九八〇年代には二万人程にまで増加した。

中国人の大部分は、インド第三の都市コルカタに居住しており、コルカタはインドで唯一チャイナタウンを有する街である。このように中国人がコルカタに集中している理由としては、一九一一年に首都がニューデリーに移転されるまでコルカタはインドの首都であつたこと、貿易港として発展していたことなどが考えられる。

コルカタに居住する中国人の出身地別の内訳を見ると、広東省出身者が最も多く、全体の約八〇％を占める。職業構成は、皮革業と皮革を原料とする靴製造業に従事する人の割合が最も高く、次いで

歯科医、雑貨、大工、小資本の商業等がある。皮革業と靴製造業が発達した要因としては、インドや隣国パキスタンにおいて原料の牛皮や羊皮などが豊富であつたこと、ヒンドゥー教のカースト制度によれば、靴製造の仕事は指定カーストの仕事とみなされているため、比較的競争が少ない産業であつたことなどが考えられる。

皮革業に従事する中国人の数が多いため、一九九六年にインド最高裁判所がコルカタ市内での皮なめし工場の操業を禁止したことは、中国社会に大きな影響を与えた。これは、環境汚染の原因となる産業に関し、コルカタ市内での操業を禁止し、郊外への移転を決定したものである。この決定を受け、それまで皮なめし工場を操業していた中国人のうち約三〇％は工場を郊外に移転したものの、残り七〇％は工場の廃業に追い込まれた。こうした人々は、その職業を、皮革業から中華料理店の経営等に変えている。

中国人の大部分がコルカタに居住しているため、筆者の居住しているニューデリーにおいて中国人を見掛ける機会は少なく、韓国人や日本人を見掛ける機会の方が多

い。ニューデリーに居住する中国人の数は把握できていないが、韓国人は約五〇〇〇人、日本人は二五〇〇人であるため（詳細は表1を参照）、中国人の数はこれよりも少ないものと推測される。また、諸外国の主要都市と比べ、ニューデリーでは中華料理店の数も圧倒的に少なく、その味もインド風にアレンジされており、あまり美味しくはない。ここまで中国の存在感が薄い大都市も珍しいだろう。

ニューデリーに進出している中国の企業数も、日本や韓国に比べて圧倒的に少ない。ニューデリーに拠点を設けている中国企業の一例としては、家電メーカーのハイアール社や、発電機メーカーの大手である上海電気集団が挙げられる。また、ニューデリー近郊の新興都市グルガオンには、通信産業関連のZTE社やファアウェイ社も拠点を置いている。インドの急速な経済発展にともない、現在、続々と外国企業がインドに進出しているため、今後、多くの中国企業がインドに進出するものと予想される。それにともない、ニューデリー市内にも中華料理店が増え、当地でも美味しい中華料理が食べられる日が来ることを心待ち

にしたい。

（はらしま あずさ）

#### 《参考文献》

- 山下清海「二〇〇九」「インドの華人社会とチャイナタウン——コルカタを中心に——」地理空間、二巻、一号、三二—五〇ページ。

#### 《新聞記事（新聞名Mint）》

- “Longing to Return to a Free Land” 二〇一二年四月五日。
- “A Shrinking Community” 二〇一二年四月一日。

#### 《ホームページ》

- ダライ・ラマ法王日本代表部事務所ホームページ（二〇一二年五月三日アクセス）。